

22J-am06

関節リウマチ、がん疾患における血漿中プロカルボキシペプチダーゼR濃度について

○河村 剛至¹, 安野 伸浩², 田中 雅彦³, 佐古 兼一¹, 賀来 美和子¹, 田口 真由実¹, 松本 英里¹, 宮内 可菜子¹, 松田 佳和¹ (日本薬科大学薬学部,²帝京大学医学部附属病院薬剤部,³関越病院)

【目的】プロカルボキシペプチダーゼR (proCPR) は別名 Thrombin Activatable Fibrinolysis Inhibitor (TAFI) と呼ばれ、血液中でカルボキシペプチダーゼRの前駆体として存在する。活性化により線溶を抑制することが知られている一方、炎症性ペプチドを不活性化させ、炎症の制御に関わっていることが示唆されている。我々はELISA法によるproCPR定量測定法を用いて、患者の血液中のproCPR濃度を測定し、どの疾患、病態時にproCPR値が変動するかを調べ、この測定法の臨床検査適応の可能性を探ることを目的に研究を行った。今回は、慢性炎症性疾患に着目し、関節リウマチとがんについて解析を行った。

【方法】社会医療法人社団 新都市医療研究会〔関越〕会関越病院を利用した患者329名の血液を採取後、血漿中のproCPR濃度をサンドウィッチELISA法を用いて測定し、患者情報、既往歴(現疾患を含む)、血液一般検査値、血液生化学検査値との関連性を調べた。関節リウマチでは、バイオ製剤使用の有無、他の自己免疫疾患におけるproCPR値との比較を行った。また、がんでは、がんの種類による比較を行った。

【結果及び考察】患者の性別、年齢、体重、白血球数、好中球の割合、肝機能障害に関して、血漿中proCPR濃度との相関は認められなかった。関節リウマチでは他の疾患とproCPR平均値はほぼ変わらなかったが、バイオ製剤使用において、proCPR濃度が減少する傾向があった。がん疾患では他の疾患と比較して平均値が減少する傾向があった。proCPRは炎症の程度、血液凝固線溶などに関連している可能性があり、今後の解明が期待される。